

岩清水遺跡・考古博物館構内古墳

1987・3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、1986年に実施した甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園地内東八代郡中道町下曾根小字岩清水に所在する岩清水遺跡及び考古博物館構内古墳について、発掘調査の結果をまとめたものであります。

岩清水遺跡は、考古博物館南側の緩傾斜面に位置し、対象地域はおよそ2,600m²、調査の結果、背後の台地上の遺跡などから押し出された土砂などによって、形成された遺物包含層であることが確認されました。

一方、考古博物館構内古墳は同博物館建物の東側に位置し、墳丘はほとんど消滅し、南に開口する横穴式石室も天井部は全く失われ、側壁部も東壁が約2m程度残存するに過ぎませんが、奥壁の巨石がそのまま残り、敷石がほぼ完存していたことは幸いでした。敷石の上からは、直刀・甲冑小札類・鉄鏃・馬具類・玉類・土器類等各種の副葬品が大量に発見され、これらの遺物によって、調査者は本墳の築造年代を6世紀前半代とし、7世紀代まで追葬が行われたことを想定できるとしております。

本墳の所在する中道町は、先土器時代に始まり各時期の遺跡が豊富なことで知られていますが、本県古墳文化発祥の地として特に有名であり、付近には当時では東日本最大の規模を誇る前方後円墳鏡子塚古墳、本県最大の円墳丸山塚古墳を初め、前期古墳が集中しております。後期古墳の時代になると、その中心部は他地域に移りますが、今回の調査によって、この地の伝統的勢力は弱体化したものの、依然としてその地位を保持していたことが確認されました。特に副葬品に見られる小札類・馬具類が、西方約180mに位置し5世紀後半の築造と推定されるかんかん塚（茶塚）古墳のそれと共に通することが明らかにされ、この地の伝統的勢力の連続・推移の状況を示す興味ある資料が得られました。本報告書が、古墳研究の資料として多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、お世話をなった方々や直接発掘調査に当られた方々に改めて深甚の謝意を表します。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本報告書は山梨県東八代郡中道町下曾根小字岩清水929番地所在の岩清水遺跡、および同岩清水945番地所在の考古博物館構内古墳（略称、考博構内古墳）の発掘調査報告書である。

なお、岩清水遺跡は昭和61年10月1日～11月25日、考古博物館構内古墳は昭和61年6月5日～6月12日にかけて調査を実施した。

2. 発掘調査組織

発掘担当者 坂本美夫（山梨県埋蔵文化財センター）

調査員 宮沢公雄

3. 出土品の整理は坂本を中心に小笠原睦子、弦間千鶴、後藤良美、名取洋子、若尾澄子があたった。

4. 本報告書は坂本が執筆、編集した。

5. 遺物の写真撮影は塙原明生（日本写真家協会員）が行なった。

6. 玉類の石材鑑定は河西学氏（財団法人山梨文化財研究所）にお願いした。

7. 実測図、写真、出土遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管されている。

目 次

序 例 言

| | | |
|-----|------------|----|
| 第1章 | 位 置 と 環 境 | 1 |
| 第1節 | 位置と地理的環境 | 1 |
| 第2節 | 歴 史 的 環 境 | 1 |
| 第2章 | 岩 清 水 遺 跡 | 3 |
| 第1節 | 調 査 方 法 | 3 |
| 第2節 | 調 査 結 果 | 3 |
| 第3章 | 考古博物館構内古墳 | 4 |
| 第1節 | 古墳名及び調査小史 | 4 |
| 第2節 | 墳丘、石室構造 | 4 |
| 第3節 | 遺物出土状況及び遺物 | 11 |
| 第4節 | 小 結 | 15 |
| 第4章 | 結 | 16 |

第1章 位置と環境

第1節 位置と地理的環境

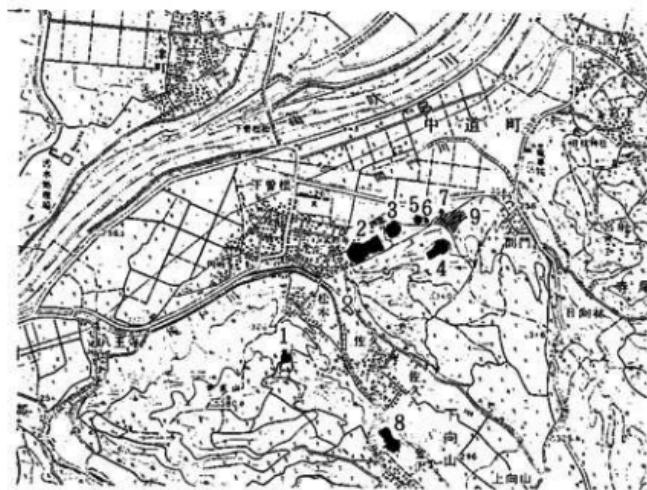
位置

岩清水遺跡、考古博物館構内古墳の所在する東八代郡中道町は、甲府盆地の南東縁に位置する。東を境川村、南を上九一色村、西を豊富村、北を笛吹川を挟んで甲府市と接し、東を境川、西を七覚川、北を笛吹川に画された南北に細長い町域を見せる。両遺跡は、この町域の北西付近の下曾根地区に位置する。国鉄中央本線甲府駅より南東方向約8.5kmの距離にある。

地理的環境

甲府盆地南東縁を、南東から北西に向って流れる笛吹川の左岸には、沖積地をはさんで東西約12.5kmにわたり、標高270~400mの曾根丘陵が続く。この丘陵の前線は急傾斜で平地の沖積地に落ちこむ。さらに御坂山塊に源を発する中小河川によって浸食され、幾つかの舌状台地を形成する。その一つに滝戸川と間門川とによって形成された台地がある。この先端に標高340.2mの東山があり、岩清水遺跡などはこの斜面が平地に接する傾斜変換線付近に位置する。おおよそ標高257m付近にあたる。

第2節 歴史的環境



第1図 周辺地域の遺跡分布状況

1. 小平沢古墳
2. 綾子塚古墳
3. 丸山塚古墳
4. 大丸山古墳
5. かんかん塚（茶塚）古墳
6. 杯塚
7. 考古博物館構内古墳
8. 天神山古墳
9. 岩清水遺跡

本遺跡の立地する中道町地域は、米倉山に所在する先土器時代の米倉山遺跡、弥生時代の女沢遺跡、東山の乗った台地南部に所在する縄文時代の上ノ原遺跡、台地下の本調査の契機となった弥生時代の岩清水遺跡など、先土器時代からの遺跡が多く見られる地域といえる。しかし、本町地域が歴史の中に顯著な足跡を残すのは弥生時代の終わ

りごろからのことといえる。まず古墳の分布を見ると米倉山の山麓鞍部には、小規模であるが本県最古と考えられる小平沢古墳（前方後方墳）が見られる。東山山麓および周辺にも幾つかの古墳の存在がある。山麓中には4世紀後半に築造され、上下二重構造の埋葬施設をもつ大丸山古墳（前方後円墳）、傾斜変換線上には4世紀末ごろの築造とされ本県最大であるばかりでなく、その時期としては東日本最大の前方後円墳で全長169mを誇る銚子塚古墳、本県最大の円墳で石室内の壁にベンガラによる小円文が施され、最古の装飾古墳ではと話題を呼んだ丸山塚古墳（直径72m）、本県最古と考えられる馬具類を副葬していたかんかん塚（茶塚）古墳、また南方の金沢地区には5世紀代の築造と考えられる本県第2位の規模をもつ天神山古墳（前方後円墳）など本県を代表する古墳が集中している。またこれらの前期古墳の周辺には、引き続いて小規模な後期古墳が築造されている。

これら古墳を築造した基盤となる集落址は未だ明確にはなっていない。それでも東山の乗った台地上に弥生時代末期～古墳時代初めの時期と考えられる立石・宮の上遺跡の存在が知られ、また同台地上には130余基にのぼる弥生時代末～古墳時代初めに渡る方形周溝墓を検出した上ノ平遺跡が存在するなど、本地域は周辺諸地域に比べ大きな勢力の存在を捉えることができる。

このように本地域は、甲斐国の中核的役割を果し、かつ中枢地域であったことを物語っている。

後期古墳の時期になると、中枢地は盆地北縁部の金川、笛吹川、荒川流域に移るが、古墳の築造は続いており、依然として大きな勢力の存在が考えられる。

奈良、平安時代の遺跡は明確ではないが、本地域が『和名抄』にいう八代郡白井郷の一部を形成していたものと考えられる。

第2章 岩清水遺跡

第1節 調査方法

今回の調査対象地域は、おおよそ2,600m²であり、傾斜変換線付近に立地するため、緩傾斜面にある。このうち西側半分は北西方向に開ける小扇状地状を呈するが、東側半分は山の裾際となり面積も狭小である。土器片などの遺物は西側半分、特に東山から流れ出る沢際に比較的多く分布していた。このため調査はトレント方式で遺構などの検出にあたることとした。

トレントは東側から1号、2号として、基本的には南北方向に5m間隔で、合計23カ所設定した。このうち19号トレントからは、地形などと、遺物包含層の範囲確認のために東西方向に設定した。

第2節 調査結果

1～8号トレントにおいては地表下30cm前後で礫混入黄褐色土ないし黄褐色土層の地山に達する。この間遺物としては陶磁器類の細片が僅かに出土したにすぎず、かつこれらの遺物は極めて新しい明治時代以降のものであった。

9～10号トレントは、やや急傾斜地に設定したトレントであり、30～80cm前後で黄褐色土層などの地山に達する。遺物はほとんど確認できなかったが、中央付近においてかつての畠の区画と考えられる石積などが確認された。

11～14・15～1・16号トレントでは、13号トレントの北端際で縄文土器片数点と、石鎌1点が比較的狭い範囲で確認された以外、土師器片がわずかに散見された程度であった。

17・18号、15～2号トレントからは土師器片が比較的多量に出土した。地表下約20cm前後の礫混入褐色土から出土しているが、いずれも細片で摩耗しているものが多く、かつ遺構と考えられる部分も認められず、遺物包含層と考えられた。このため19～21号トレントを東西に設定、調査したところ、沢より10m前後の幅に広がっていることが確認できた。土師器片は図化できるものはほとんど無いが、それでも榤、甕などの器形が見られ、古墳時代初頭頃の時期に位置付けられるものと考えられる。

22・23号トレントは地表下20cm前後で地山に達し、遺物はほとんど見られなかった。

以上、岩清水遺跡のトレント調査の結果を述べてきたが、今回の調査地区は東山の乗る台地に存在する遺跡などから押し出された土砂などによって形成された遺物包含層であることが確認できた。

第3章 考古博物館構内古墳

第1節 古墳名及び調査小史

本古墳の名称については、本墳から西方約180mに所在する古墳との間に「かんかん塚古墳」という名称をめぐり、混乱の見られるところであった。それはそれぞれの古墳の所在地が地番まで記入されていなかったことと、本墳のほとんど原状を残していないことが、原因であったものなのかもしれない。従ってこれらの古墳の所在地を明確にする手だけは無いものといえる。ただその中で本墳より西方180mに位置する古墳にのみ、地番等は不明であるものの古墳の位置関係などから、ある程度限定できる状況が存在する。すなわち昭和10年刊行の『山梨県史跡名勝天然記念物調査報告』第8輯によると、銚子塚古墳一丸山塚古墳一かんかん塚古墳一杯塚と西から東に向って古墳名が記載され、このうちのかんかん塚古墳が本墳より西方180mの下曾根小字岩清水915番地の古墳に該当する。また昭和3年に発表された小松真一氏の論文「甲斐国東八代郡下曾根村丸山古墳」（『史跡名勝天然記念物』3巻7号）においても同番地の古墳をかんかん塚古墳として、地図上に明示している。これらを根拠として西方の古墳を「かんかん塚古墳」と位置付け、さらに「かんかん塚古墳」は昭和53年に「茶塚古墳」として発掘調査が実施されているところから、かんかん塚（茶塚）古墳と呼称することにした。よって本墳については考古博物館の構内にあることから、考古博物館構内古墳（略称、考博構内古墳）とした。

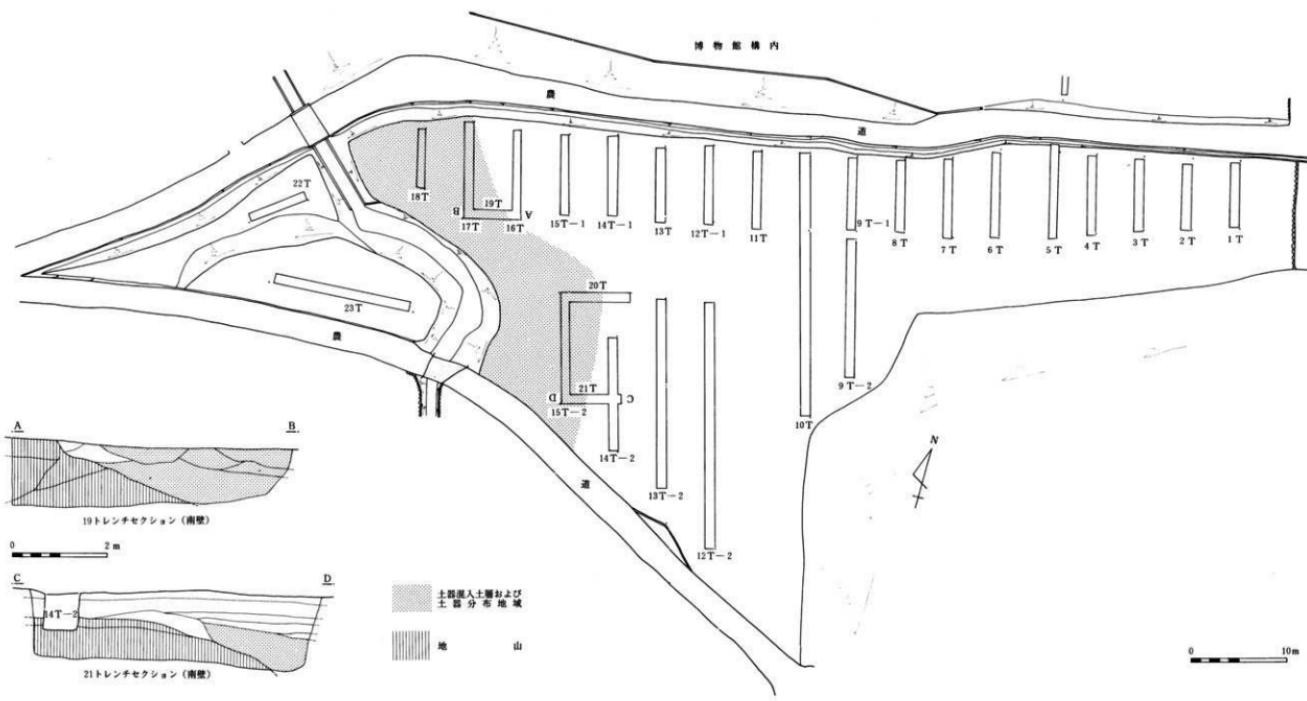
本墳の調査は今回が初めてではない。昭和56年度に考古博物館を建設するにあたり、県教育委員会によって調査が行なわれた。トレンチ方式で調査されたが、予備的性格をもっていたためか成果は多くなかった。

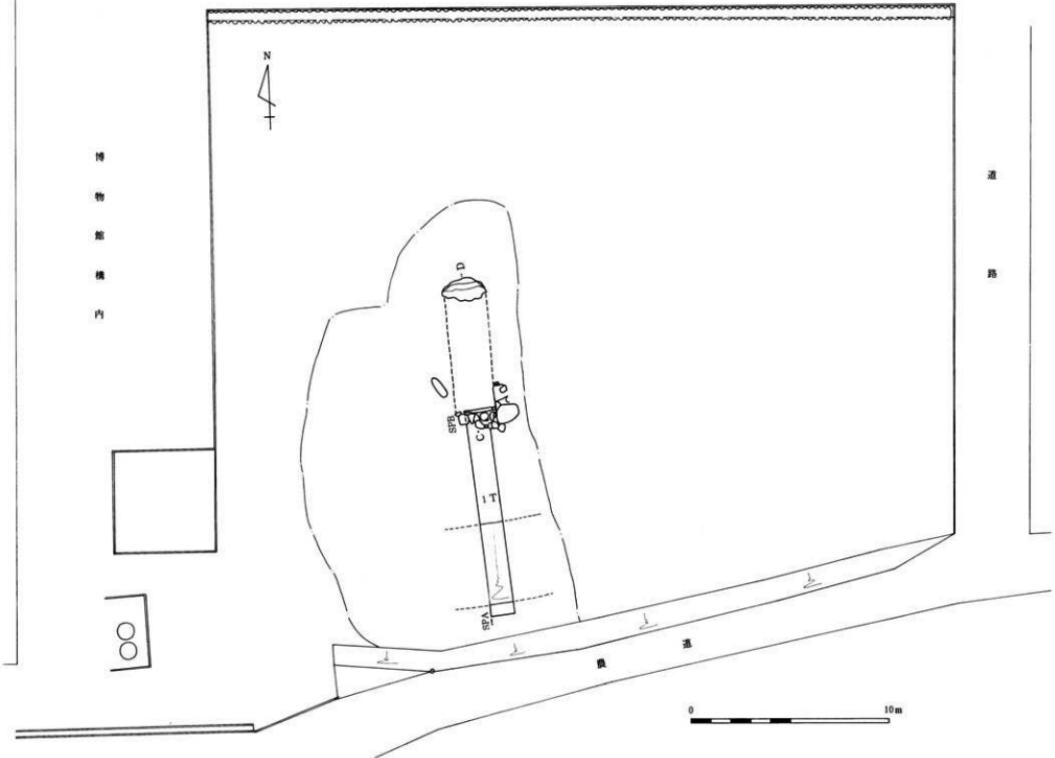
従って今回の調査は第2次調査ということになり、公園造成に先立ち石室の残存の有無、形態、規模を明らかにすることにあった。

第2節 墳丘・石室構造

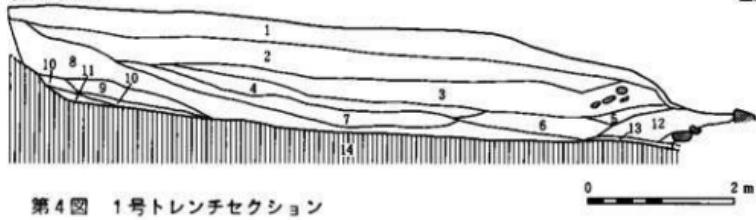
墳丘

本墳の墳丘は、ほとんど消滅している状況であった。わずかに南側の道路から北側の奥壁と考えられていた盤石付近までの幅11m、長さ22mほどの間に、細長く小～大礫が高さ50cmほどに堆積していた程度で、これから墳丘形状を復元することは不可能であった。また調査も石室を中心とするものであったため、トレンチは石室から東側、それに石室入口部から南側への2本を設定したにすぎない。このうち東側のトレンチは石室より3mほどのところから、産業廃棄物などを埋めるための大きな溝が掘られていたため、周溝などを確認することはできなかった。このため規模は全く不明といえる。しかし石室規模を周辺地域の古墳と比較することによって割り出した墳丘規模は、およそ15m前後になるのではないかと考えられる。





第3図 考古博物館構内古墳位置図



第4図 1号トレンチセクション

| 土壤剖面 | |
|------|-----------------------|
| 1 | 褐色土（耕作土） |
| 2 | 褐色土（黒褐色の子壌土） |
| 3 | 褐色土（黒褐色の子壌土） |
| 4 | 褐色土（小耕作土） |
| 5 | 褐色土（=） |
| 6 | 褐色土 |
| 7 | 褐色土 |
| 8 | 褐褐色土（白、黑色粘子壌土） |
| 9 | 褐褐色土（白、黑色粘子壌土） |
| 10 | 褐褐色土（白、黑色粘子壌土） |
| 11 | 褐褐色土（白、黑色粘子壌土） |
| 12 | 褐色土（小耕作土） |
| 13 | 褐色土（耕作土） |
| 14 | 褐褐色土（地山、黒褐色の子壌土、粘性あり） |

南側に設定したトレンチでは、古墳築造にかかわる削平部分が確認された。すなわち石室の閉塞施設の下に地山がもぐり込む状況になっており、この地山が閉塞施設より南側へわずかな上り勾配で続いており、間仕切り石より約9m付近で45度位の角度を持って、立ち上がっている状況が確認できた。おそらくこの状況は斜面上への古墳築造にあたり、石室を南側に閉口させ、かつ石室の床面を水平に保つため、地盤を平坦にする必要があったための方策と考えられる。

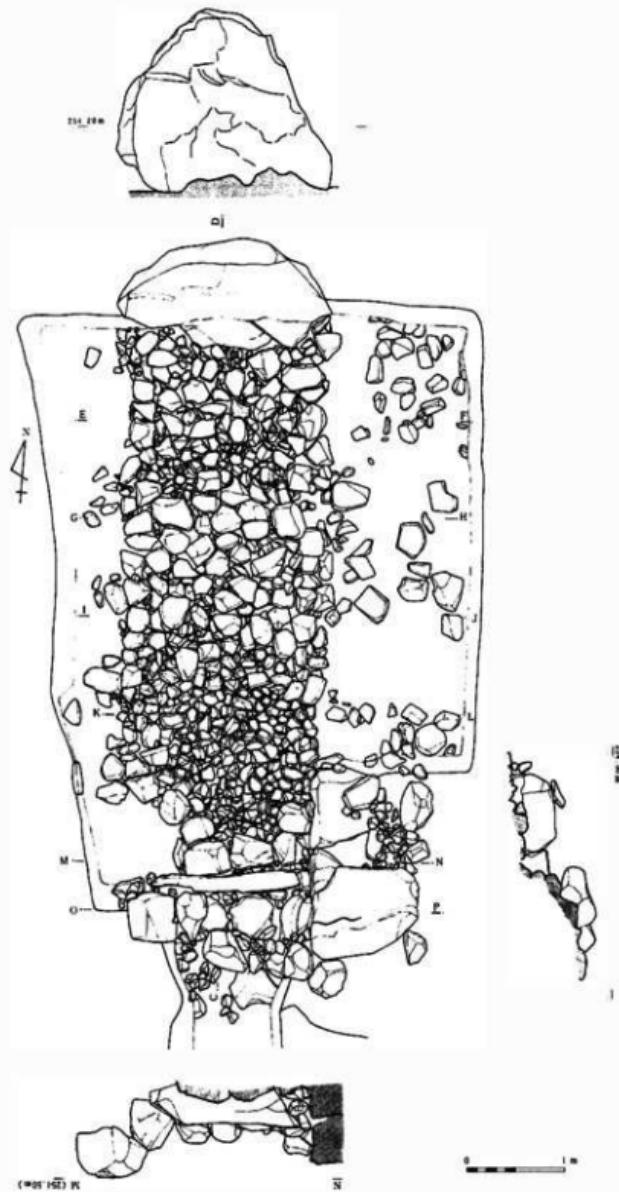
石室

石室は今回確認されたもので、南に開口する横穴式石室である。無袖形の構造のものであるが、天井部は全く失なわれ、かつ側壁部も閉塞石から続く東壁が約2m程度残存するにすぎなかった。しかし幸いにも敷石が閉塞石の西側部分の極一部を破壊されていた以外完存しており、石室形態を把握できた。石室の主軸方向はN-4°-Wを指す。石室規模は石室全長6.55m、玄室の長さ5.7m、幅は奥壁部で2.18m、中央部で2.15m、閉塞部近くで2.13mほどを割るものと考えられ、側壁が直線的でしかも幅がほとんど同一の長方形の形態をとるものといえる。玄室と閉塞部との区別は厚さ20cm、長さ1.55m、高さ40cmほどの平石を裾部の先端より約0.7m付近の内側に立てた間仕切り石でなし、側壁と平石の空隙は小型の石をもって塞ぎ、かつ間仕切り石の内側直下に直径50cmほどの礫を裾え、倒れるのを防ぐ方策が構じられている。間仕切り石の外側には50cm前後の礫の長軸を主軸方向に合わせて1列に積み上げて石室を閉塞している。

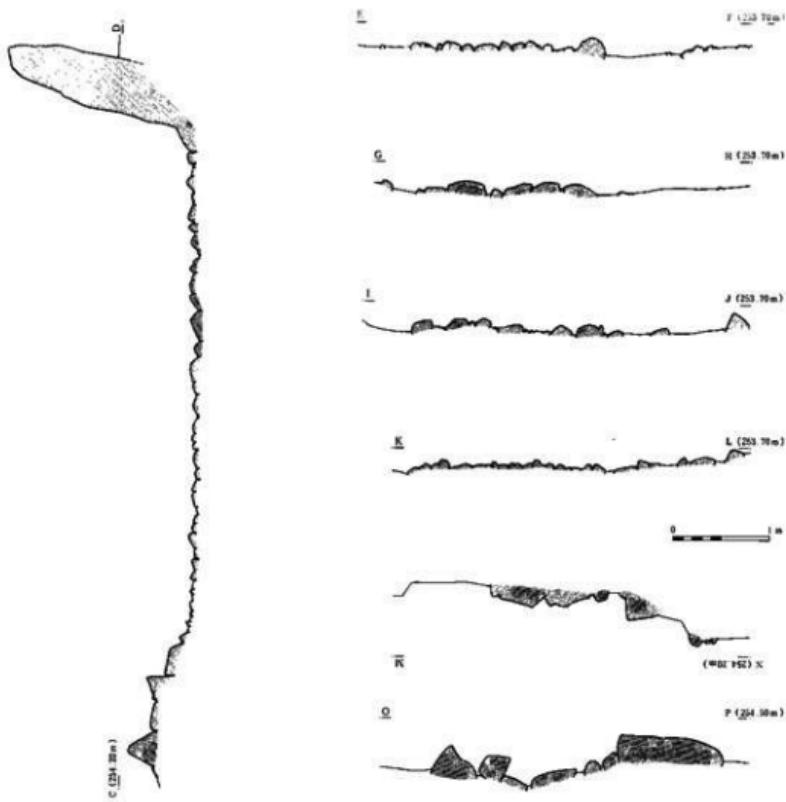
側壁は東壁の一部が存在していた。現状で2段の積み上げが確認できる。そのうち最下段はやや小振りの石の小口面あるいは横口面を内側に向か、その上に長さ1.1m幅0.9m、厚さ40cmほどの大きな石を小口積みにして構築している。しかし両側壁のすべてが、このような方法で構築されていたか否か明確でない。

奥壁は幅2.25m、高さ1.9m以上の巨石を使用しているが、上部の左右がやや角を欠いており、当然この部分に礫を補充して奥壁を構築したものであろう。また裾部の一部が石室側に張り出しているため、この部分に敷石としての礫を置く必要がなかったものといえる。

敷石は石室の南西部の間仕切り石近くが、およそ0.4m程破壊されている以外は完存している。全体的に大きめな石の間に小さな石をはめこんで、意識的に平坦に作ろうとしているが、



第5図 石室展開図



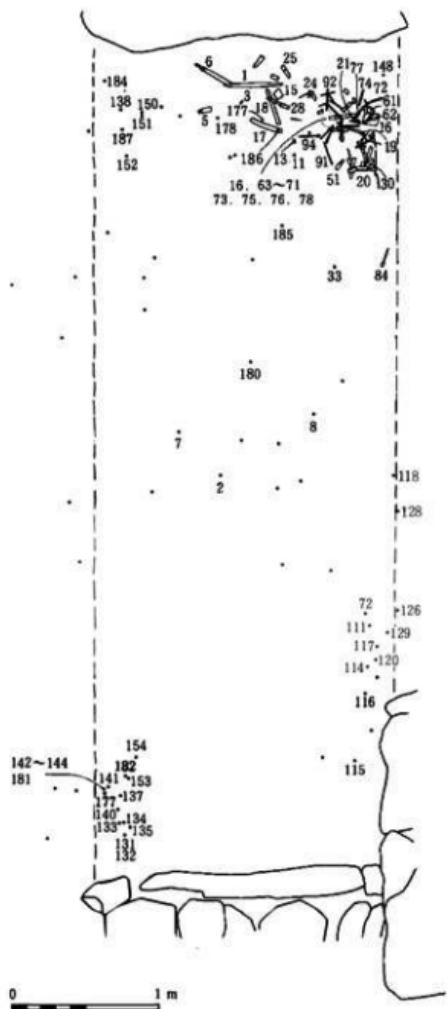
第6図 石室断面図

特に間仕切り石から約2m付近までの間が比較的小振りの石を使っているのに対し、それから奥壁にかけての間は直径30cm前後と比較的大振りの石を中心に構成されているのが看取され、玄室内においても空間上に性格の違いの存在したことを捉えることができる。

第3節 遺物出土状況及び遺物

遺物の出土状況

石室内の敷石の上部には、土砂と共に小礫それに割石の小片が比較的厚く堆積していた。割石の小片は石室用材を再利用するために割った時のもので、周辺には矢穴の穿たれた大型の石材が幾つか見られた。これらの中から陶磁器片と共に、わずかながら須恵器の小破片が採集された。遺物のはほとんどは敷石の直上から発見されている。特に奥壁近くにおいて集中的に出土した。直刀、小札類、鐵鎌、管玉、勾玉、丸玉などである。東壁近くから馬具類の出土が多く



第7図 遺物出土状況

見られ、また石室南西部の敷石の破壊された部分の土中より丸玉などがまとまって発見された。

土器類の出土は極めてわずかであり、石室中央から閉塞部の間ににおいて須恵器平瓶、土師器壺などがみられた。いずれにしても、これらは原位置に置かれていたとは思われない状況であった。

遺物

直刀

二振り見られる。1は現存長40.6cm、茎部8.6cmほどである。関は棟側が明確にならないが、刃関同様に撫角と考えられる。棟厚5mm、刃幅2.2cmの両関平棟平造である。6は全長31cm、茎部7.2cmほどの短刀である。1同様に両関平棟平造であり、棟厚4mm、刃幅2.1cmを測る。2～5は附属刀装具である。2は把頭で鉄装円頭把頭であり、側面に布の圧痕が認められる。3は佩用の足金具、4は資金具でいずれも銀張りである。5は鞘尻金具で青銅製で、中に鞘の木質部の残存を見る。

工具

2点ほど見られる。7は刀子であり全長10.8cmを測る。8は鏃であり、刃部は三角形を呈する。刃部の中間が欠損しており、大きさは不明である。茎部は長さ8.8cmを測る。

弓

9～14は弓の弦金具と考えられるものであり、おおよそ2.7cmの大きさである。

甲冑小札類

甲冑を構成したと考えられる小札類が出土している。しかし、これら小札類が成品のどの部分に付くものは明確にはならない。小札類を形状、大きさによって分類するとおおよそ4種類ほどに分類される。

1類（15～16） 縦10cm、横11cmのやや長方形に近い形状で、片面が大きく湾曲し、周囲に小孔をめぐらしている。

2類（17～18） 端の一方が直線、片方が三角形を呈し、中央で屈曲する形状である。周囲にある間隔をもって小孔が穿たれている。

3類（19～54） 量的に最も多い小札である。端の一方が隅丸状、片方が三角形を呈し、隅丸状の端の側で屈曲する。周囲にある間隔をもって小孔が穿たれている。19は小札の大きさが、知られる例で、全長22.5cmを測る。また20は小札の使用された状況を示す例で、2枚が重ね合った状況で確認された。

4類（55～60） 3類に比べて幅広の小札である。周囲にある間隔で小孔が見られる。

以上、4種類ほどの小札類が確認された。これら小札には小孔が見られるものの、鉢の遺存は全く見られず革などで綴じたものと考えられる。

鉄鎌

鎌身のみで約40点ほどを数え、量的に多い。形態から、おおよそ6種類ほどに分けられる。

1類（61） 両丸造広鋒長三角形式

2類（62） 五角形式

3類（63～71） 両丸造広鋒長三角形腹抉鎌被式

4類（72～80） 三角形広鋒長茎鎌被式

5類（81～89） 三角形広鋒長茎鎌被式に類似するもので、鎌身と茎との間に腹抉状の突起が存在する。

6類（90～98） 切刃片丸鑿箭式

このうち1～5類は平根鎌、6類が尖根鎌であって、前者が多数を占める。

馬具

轡鉤具金具（115～116）

鉄地金銅張。2個見つかっているが、形態に若干の違いを看取でき、複数組の轡の存在を想定できるかもしれない。

鞍（126～128）

鞍の後輪などに取付けられる金具であるが2形態見られる。

鉗具（129）

鉄製の鉗具と考えられるものである。刺金と基部を欠損しているが、環状形態をとるものであろう。

環状形辻金具（124）

素環鏡板付轡あるいは刀装具とは考えられないものであり、一応環状形雲珠の環の一部では

ないかと推定した。

半球形辻金具 (125)

有脚半球形辻金具の鉢部の上部に取付けられた花形座および飾鉢と考えられるものである。現状では金銅張の有無は明確にならない。

飾金具 (111~114、117~123)

方形 (111~114) と小はぜ形 (117~123) の2形態がある。方形は四隅に鉢をもち、中央に外縁と同様な方形孔がくり抜かれている。鉢頭が白色を呈するもので銀覆と思われる。小はぜ形は鉄地金銅張りであり、鉢の数に3本と2本のものとが見られる。これらはあるいは環状形辻金具、組合せ辻金具などの爪金具になるものかもしれない。

金環 (130)

直径 1.7cmほどを測る。銅地金張。

玉類

管玉 (187)

碧玉製。直径 0.9cm、長さ 2.4cmを測り、片方向からの穿孔である。

勾玉 (184~186)

184、186が蛇紋岩製、185が滑石製ないし蛇紋岩製である。いずれもやや偏平な造りである。

丸玉 (131~153)

蛇紋岩製 (131~147)と土製 (150~153)、それにガラス製 (148~149) とがある。

小玉 (154~183)

ガラス製。整形に幾つか雑なものが見られる。

| 番号 | 種類 | 材質 | 重(㌘) | 番号 | 種類 | 材質 | 重(㌘) | 番号 | 種類 | 材質 | 重(㌘) |
|-----|----|-----|------|-----|----|-----|------|-----|----|-----|------|
| 131 | 丸玉 | 蛇紋岩 | 1.74 | 150 | 丸玉 | 土製 | 2.73 | 169 | 小玉 | ガラス | 0.04 |
| 132 | " | " | 1.73 | 151 | " | " | 2.39 | 170 | " | " | 0.04 |
| 133 | " | " | 1.88 | 152 | " | " | 2.39 | 171 | " | " | 0.03 |
| 134 | " | " | 1.42 | 153 | " | " | 2.41 | 172 | " | " | 0.03 |
| 135 | " | " | 1.88 | 154 | 小玉 | ガラス | 0.12 | 173 | " | " | 0.03 |
| 136 | " | " | 1.92 | 155 | " | " | 0.05 | 174 | " | " | 0.03 |
| 137 | " | " | 1.23 | 156 | " | " | 0.05 | 175 | " | " | 0.02 |
| 138 | " | " | 1.44 | 157 | " | " | 0.05 | 176 | " | " | 0.08 |
| 139 | " | " | 2.06 | 158 | " | " | 0.04 | 177 | " | " | 0.03 |
| 140 | " | " | 1.69 | 159 | " | " | 0.04 | 178 | " | " | 0.05 |
| 141 | " | " | 1.70 | 160 | " | " | 0.04 | 179 | " | " | 0.03 |
| 142 | " | " | 2.68 | 161 | " | " | 0.03 | 180 | " | " | 0.03 |
| 143 | " | " | 2.08 | 162 | " | " | 0.04 | 181 | " | " | 0.03 |
| 144 | " | " | 1.85 | 163 | " | " | 0.04 | 182 | " | " | 0.08 |
| 145 | " | " | 1.30 | 164 | " | " | 0.03 | 183 | " | " | 0.04 |
| 146 | " | " | 1.19 | 165 | " | " | 0.03 | 184 | 勾玉 | 蛇紋岩 | 2.08 |
| 147 | " | " | 1.12 | 166 | " | " | 0.03 | 185 | " | " | 1.83 |
| 148 | " | ガラス | 1.03 | 167 | " | " | 0.04 | 186 | " | 蛇紋岩 | 1.60 |
| 149 | " | " | 0.83 | 168 | " | " | 0.05 | 187 | 管玉 | 男玉 | 3.88 |

表、玉類一覧

土器類（188～200）

須恵器には細片であるが甕（188、193、194）、長頸壺（189）、平瓶（190）、フラスコ形提瓶（191、192）とがある。このうち193は細片であるが、波状文が施され、胎土がセビア色を呈する。

土師器には古墳の副葬品と考えられる器体部下半に稜を有する壺（195、197）、偏平な半球形の壺（196）と、後世の再利用の際に混入したと考えられる器体部下半に麓削を持つ壺（198、199）・皿（200）とがある。この中で197は内外面ともに丹塗り、199は内面黒色である。

第4節 小結

本墳の築造年代について考えてみたい。まず須恵器類のうち長頸壺、平瓶、フラスコ形提瓶などは7世紀前半～中頃に置かれるものであろう。甕（188、193）類は、長頸壺などよりは遅るものと考えられ、およそ6世紀前半代に位置付けが可能といえよう。土師器の壺のうち195・197は6世紀代の前半代、196は7世紀代の時期を想定できる。^(注1)

直刀はいずれも撫角の両刃平棟平造である。この形態は特に5世紀代から6世紀前半代に、^(注2)さらに6のような尖形の茎尻は6世紀前半代に位置付けられている。鉄装円頭把頭は木芯目釘留式であり、およそ6世紀前半代に位置付けられている。また吊手金具は二足佩用の金具であり、およそ6世紀前半に釣手佩用から二足佩用に変わると捉えられている。^(注3)

鉄鎌は6形態ほどあるが、いずれも後期古墳に通有的に見られる形態である。しかし県内における終末期と考えられる古墳より出土する鉄鎌の形態とは趣を異にし、それ以前に位置付けられるものと思われる。その中で、腹抉を持つ三角形広鋒茎鎌被式（72～80）、切刃片丸鑿箭式（90～98）などは6世紀前半代を想定できる。^(注4)

馬具類のうち鉤金具の形態は、6世紀前半代でも6世紀第2四半世紀前半代までに限定されるようである。また環状形雲珠も同様の時期が考えられる。一方、半球形辻金具は6世紀第2～7世紀第2四半世紀ごろまで存在が確認されるものである。鉸具は形態にやや不安な面を残すが、環状形鉸具とすれば6世紀後半代に位置付けが可能といえる。^(注5)

小札類については明確にできない。しかし一般的には5世紀中頃から6世紀代に集中して見られることから、およそこの年代を想定することも可能であろう。

これからすれば、本墳の築造年代を6世紀前半代、細かく見れば6世紀第1～第2四半世紀前半代に想定することができる。そして、やや明確性を欠くが6世紀後半、それに7世紀前半～中頃に追葬のあったことが窺える。その後10世紀後半代の再利用などによる土器の混入が見られるところとなる。

本墳の築造時期を特に馬具類を中心に考えてきた。判断資料としては良好なものとはいえないが、先の年代観とすれば横穴式石室の形態に興味ある点が加わってくる。それは本県における横穴式石室の導入が、まず石室幅の変化の見られない無袖形横穴式石室に始まったのではないかとかつて推定したことがあり、本例もまさに該当するところとなる。ここに類例の増加が見られ、その可能性が一段と強まってきたのではないかと考えられる。^(注6)

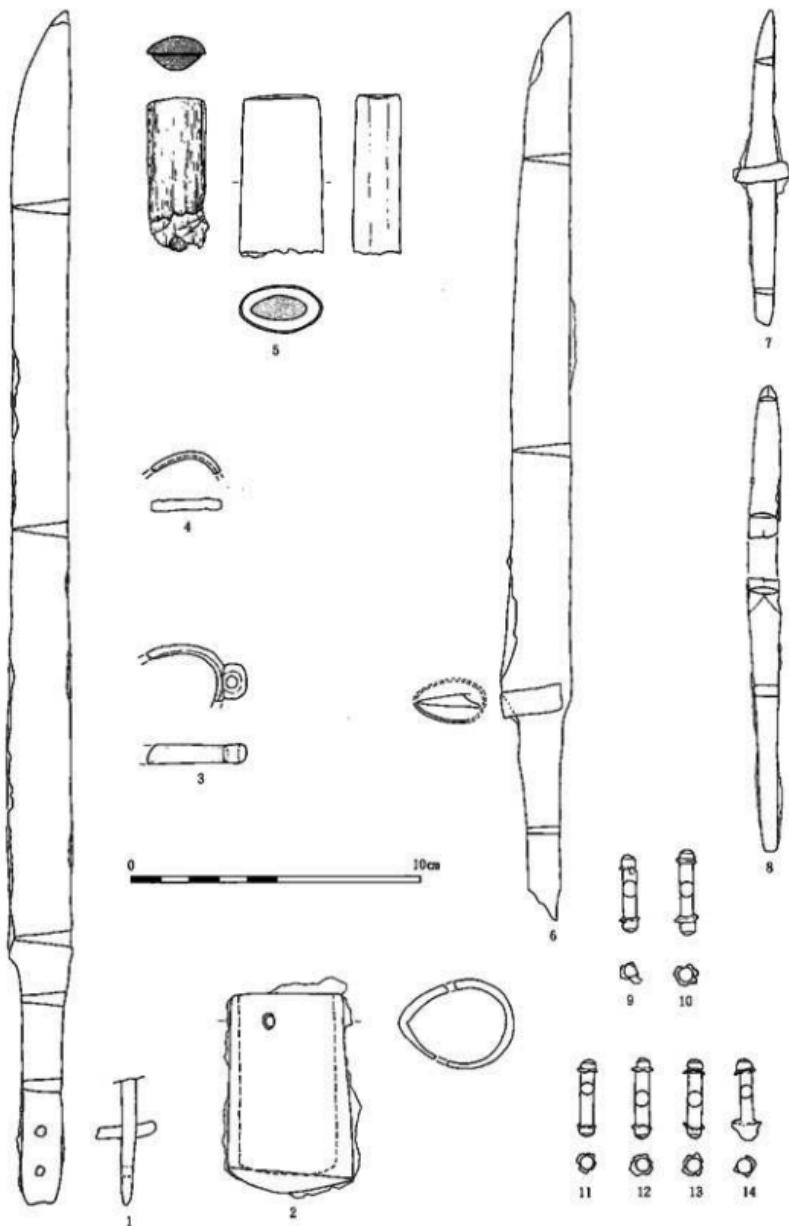
第4章 結

岩清水遺跡、考古博物館構内古墳の調査結果について述べてきた。このうち後者において見るべきものがあった。外觀からは全く姿を消したといえるような古墳から、夥しい副葬品が出土し、それらから6世紀前半に築造され、7世紀代まで追葬が行なわれたことが想定できるところとなった。特に副葬品の中に見られる小札類、馬具類は、西方約180mに位置する5世紀後半の築造と考えられるかんかん塚（茶塚）古墳の副葬品と共通するところであり、古墳時代後期に中心地が盆地北縁の地域に移ったとはいえ、大丸山古墳、銚子塚古墳、丸山塚古墳、天神山古墳などを築いた伝統的地域の勢力は、やや勢力的には弱体化したもの、依然としてその勢力を温存していたことが確認できるところとなった。本地域に存在する他の後期古墳の調査の進展によっては、伝統的地域のその後の性格を把握することも可能ではないかと考えられる。

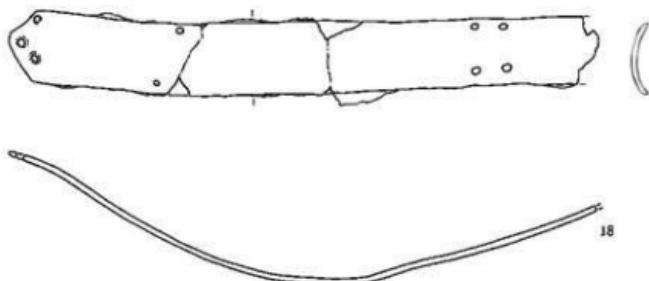
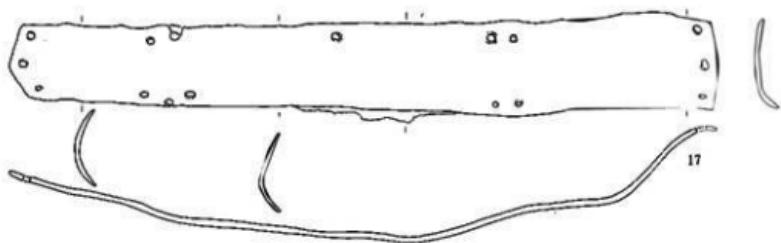
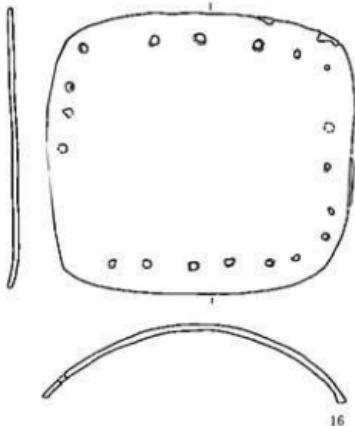
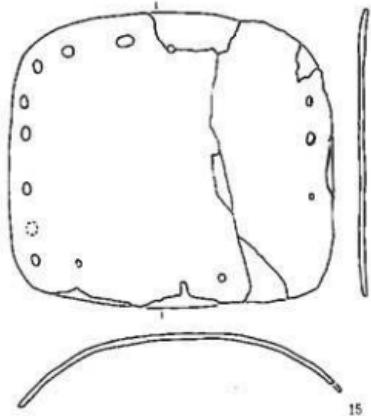
最後に発掘調査、整理作業にあたった方々、小札類についてご教示いただいた奈良県立橿原考古学研究所の松永博明氏に記して謝意を表したい。

註

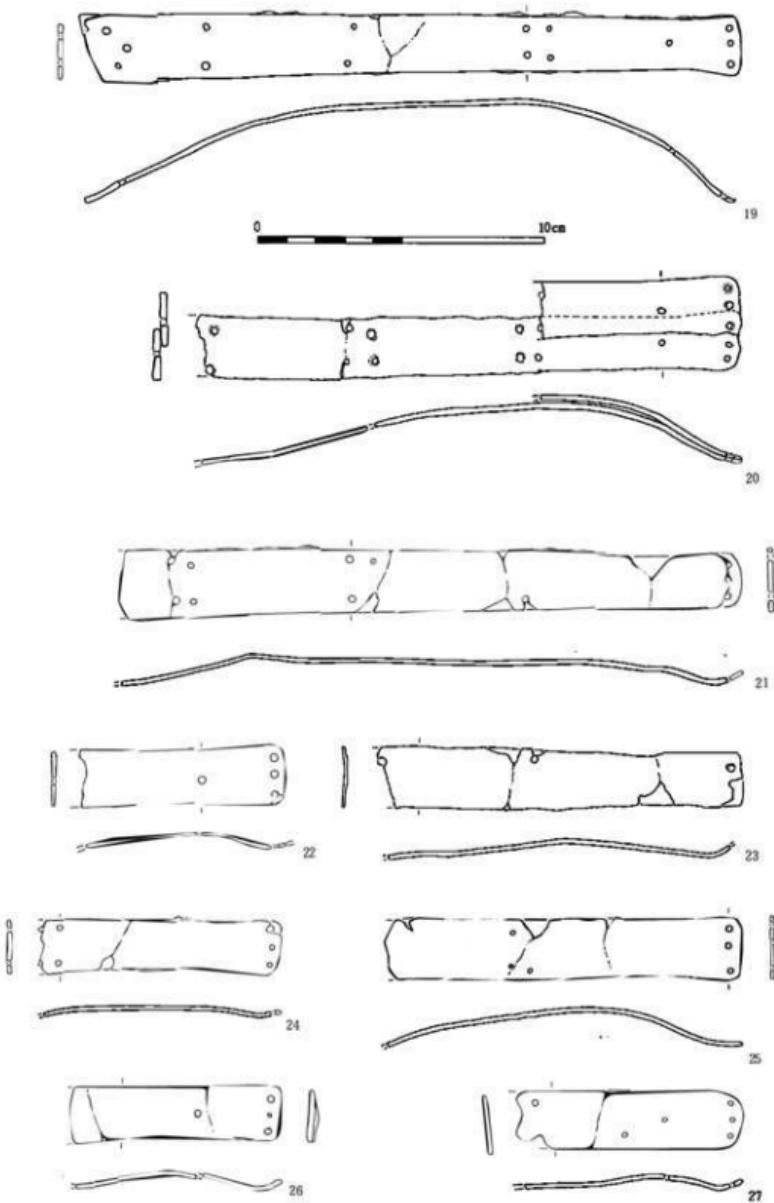
1. 中村浩 1981 『和泉陶邑窯の研究』
2. 坂本美夫、末木健 1984 『古墳時代土器の研究—山梨県一』
3. 石井昌国 1974 『古代の刀剣』 『日本古代文化研究の探求一鉄』
4. 白杵歎 1984 『古墳時代の鐵刀について』 『日本古代文化研究』創刊号
5. 滝瀬芳之 1984 『円頭・圭頭・方頭大刀について』 『日本古代文化研究』創刊号
6. 池上悟 1982 『後期古墳時代集落址出土鐵鎌に関する若干の問題』 『東京考古』 1
7. 後藤守一 1939 『上古時代鐵鎌の研究』 『人類学雑誌』 54卷 4号
8. 坂本美夫 1985 『馬具』
9. 坂本美夫 1986 『大藏經寺山無名墳の提起する問題』 『山梨県考古学論集』 1
(野沢昌康先生頌寿記念論文集)



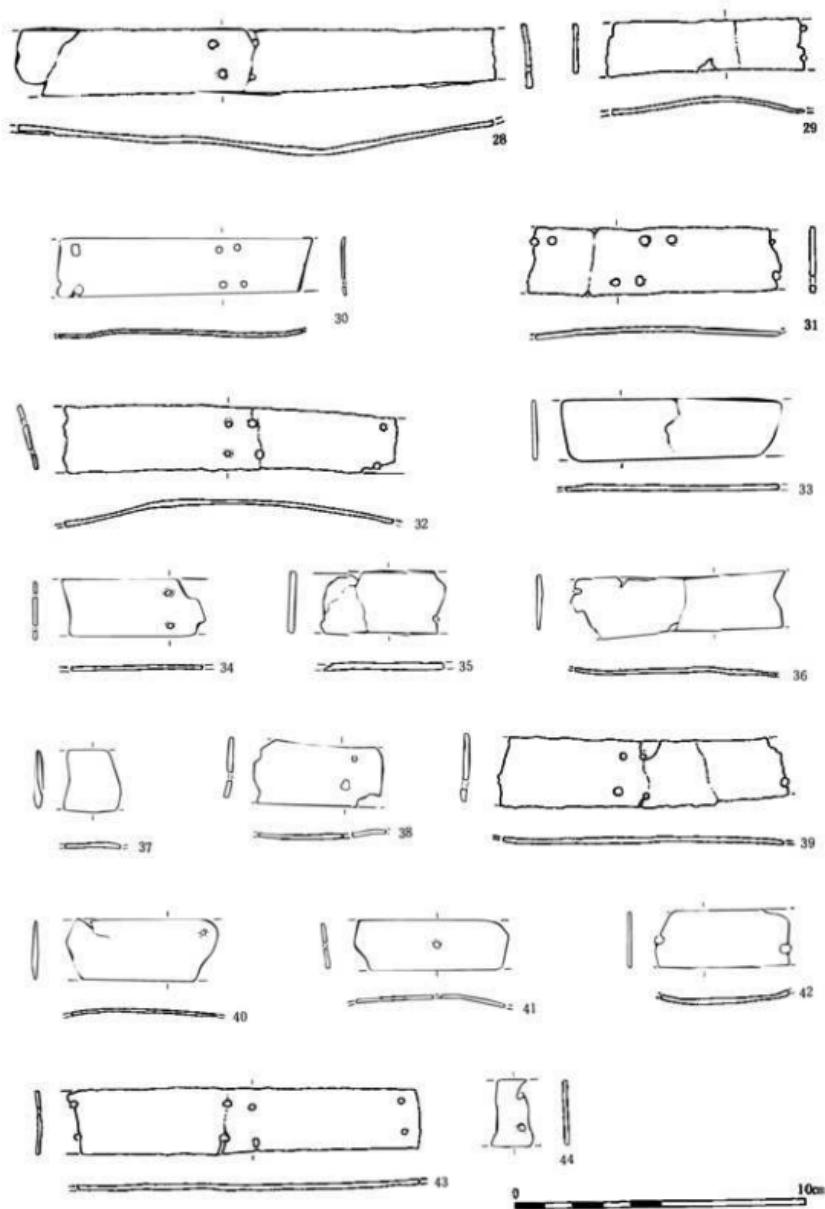
第8図 出土遺物(1)



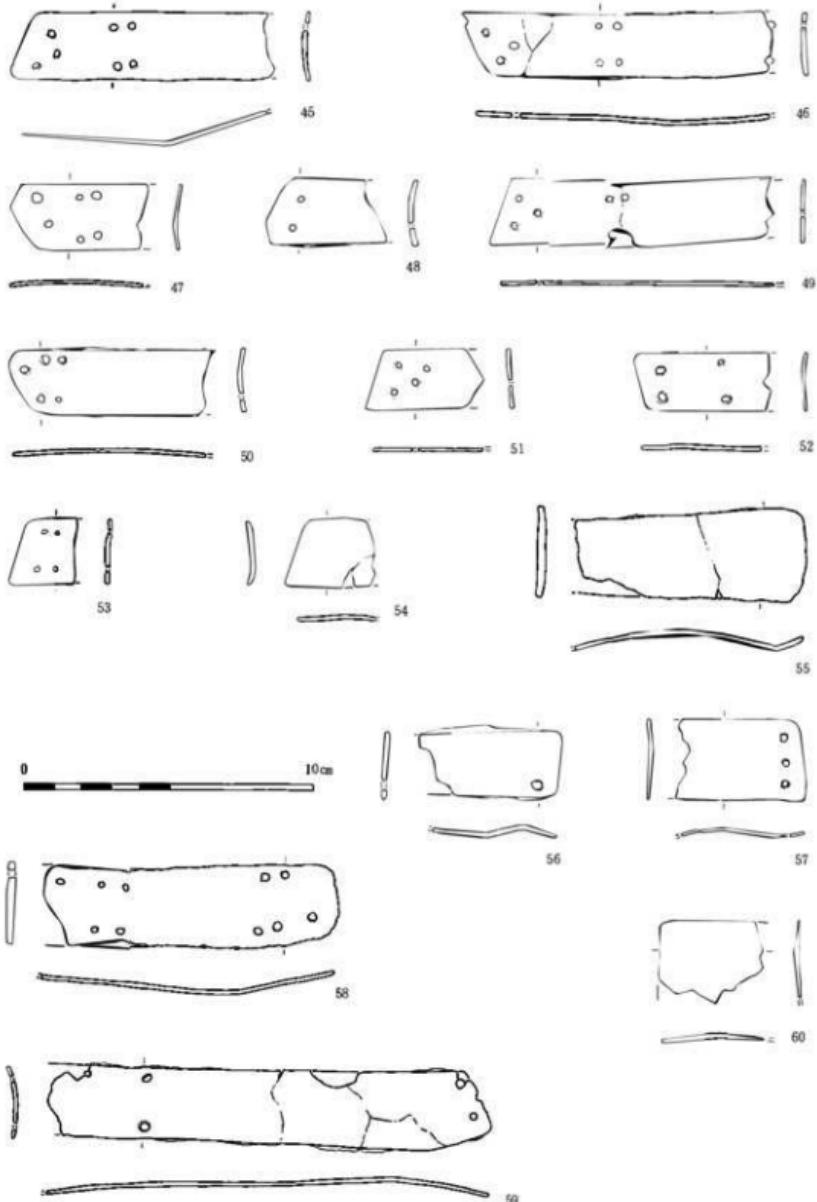
第9図 出土遺物(2)



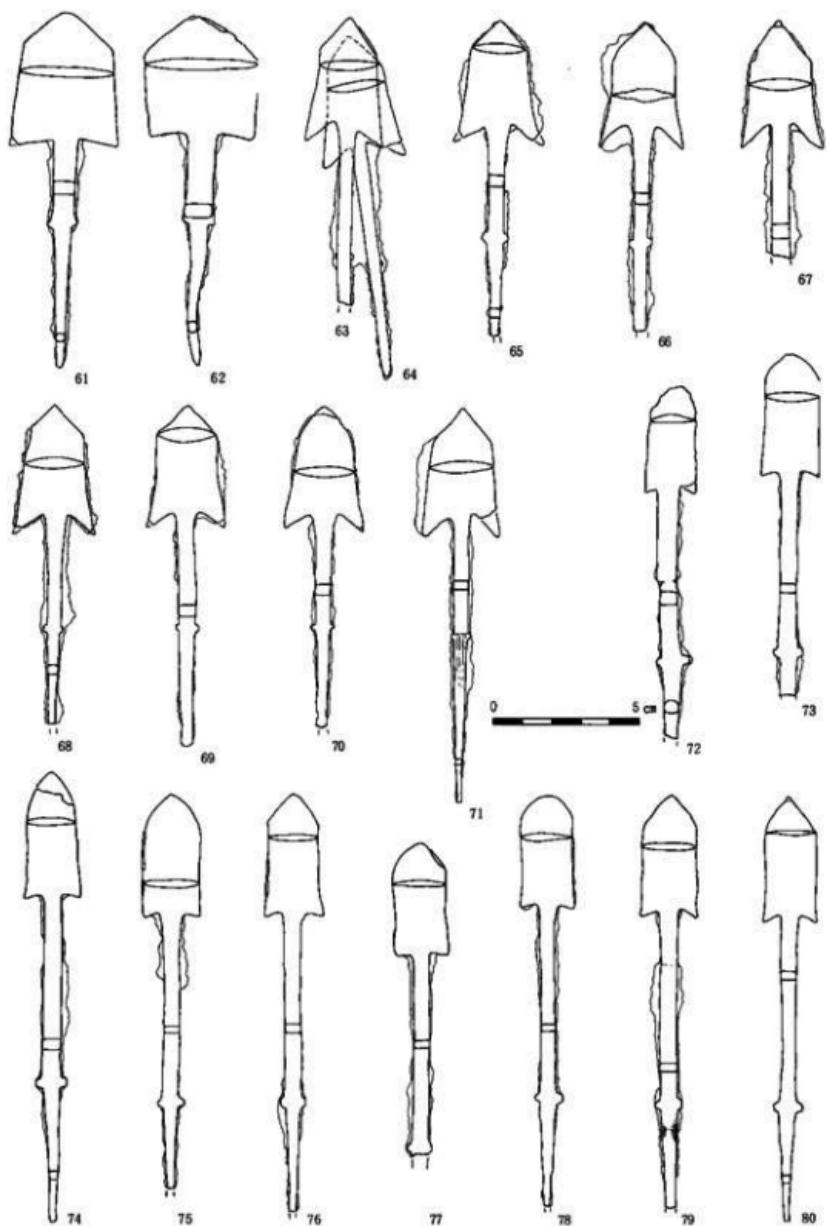
第10図 出土遺物(3)



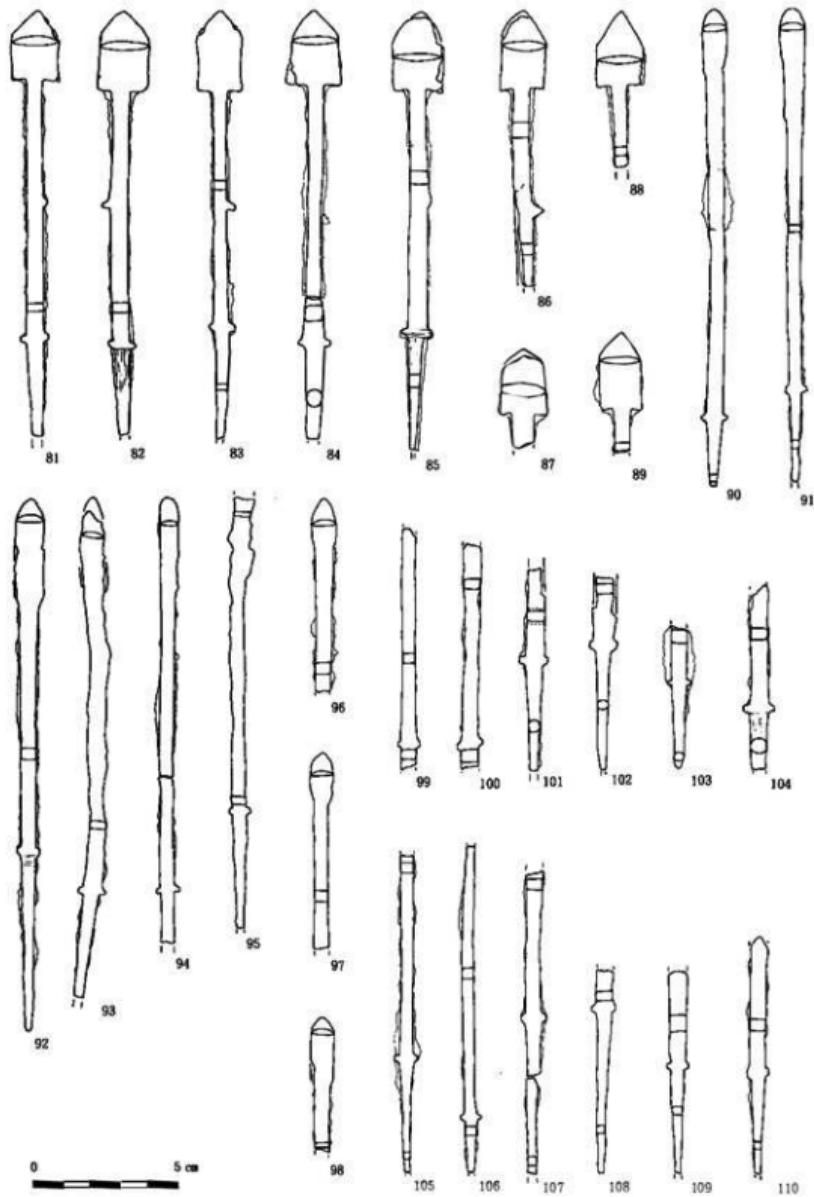
第11図 出土遺物(4)



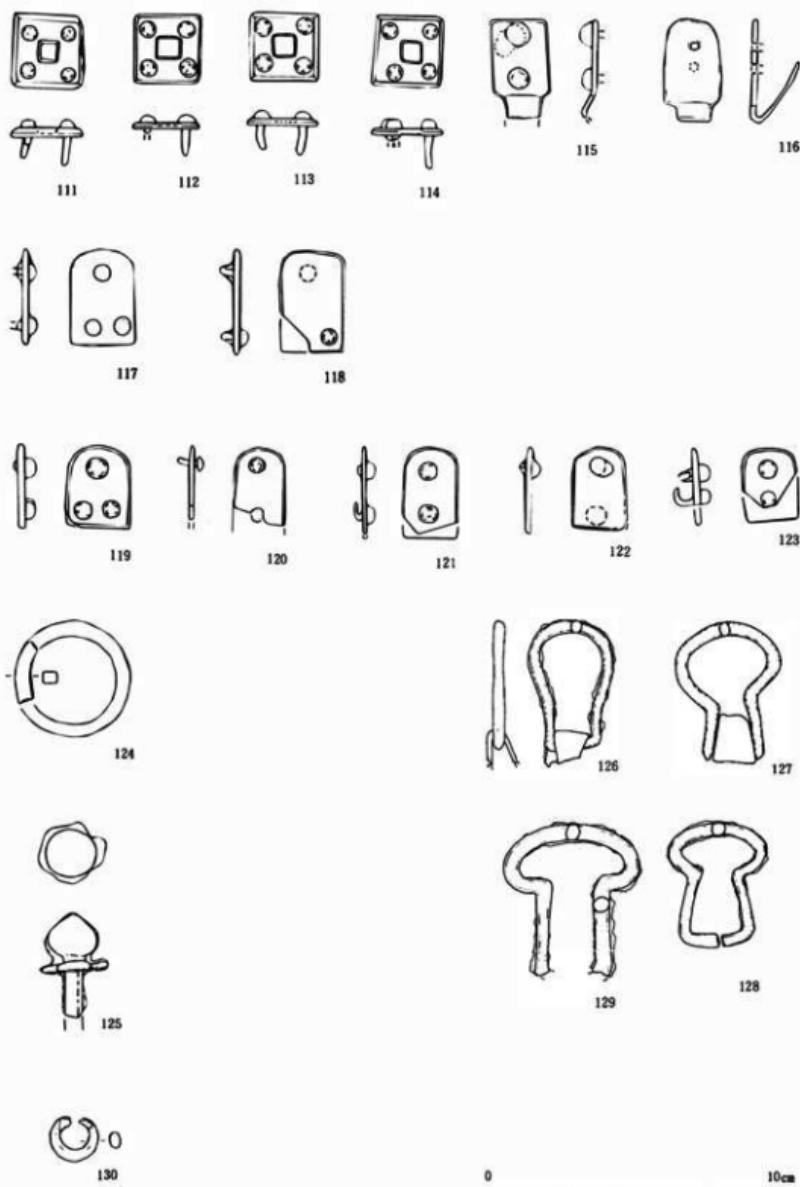
第12図 出土遺物(5)



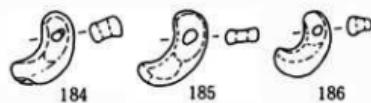
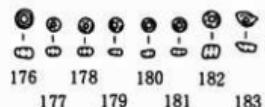
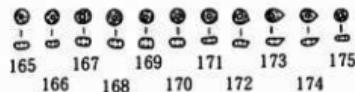
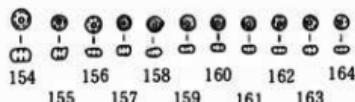
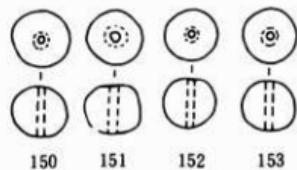
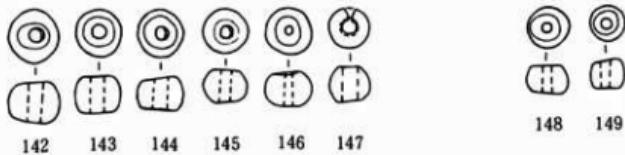
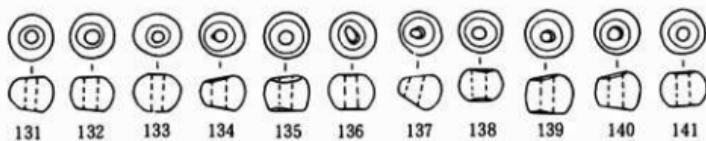
第13図 出土遺物(6)



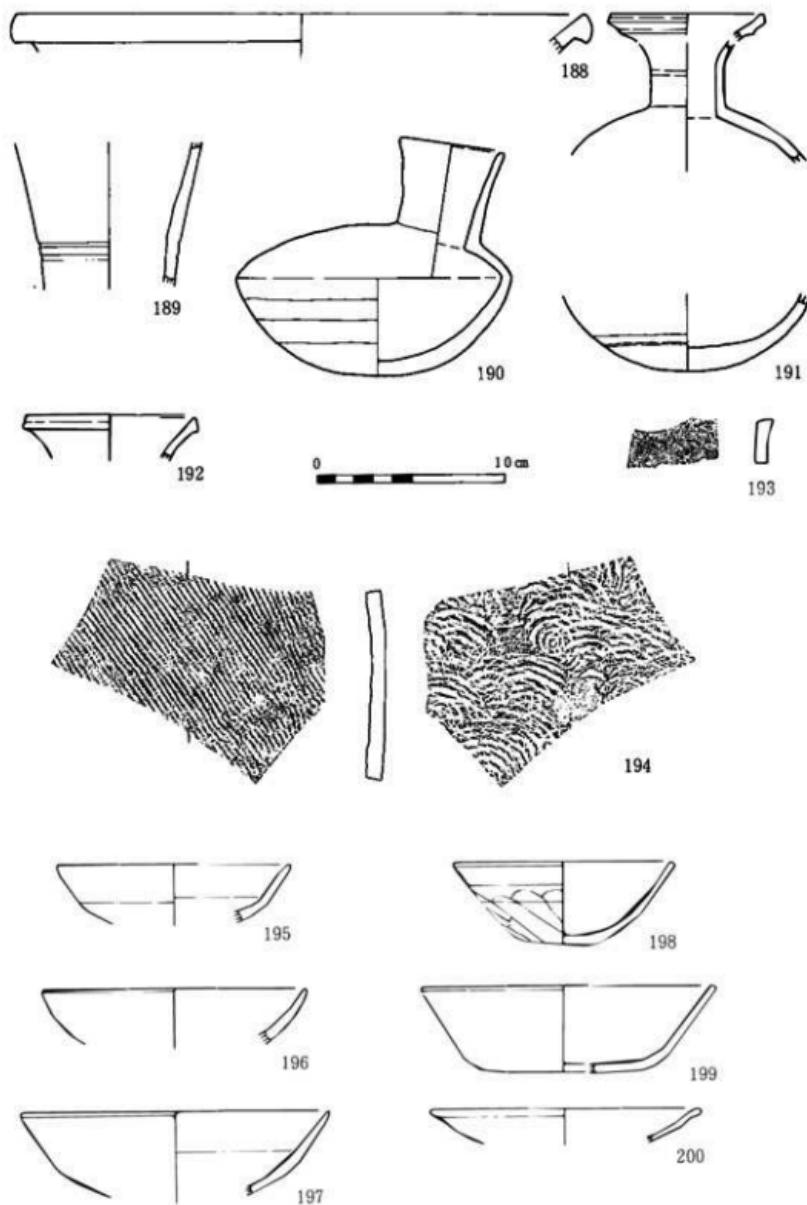
第14図 出土遺物(7)



第15図 出土遺物(8)



第16図 出土遺物(9)



第17図 出土遺物(10)



岩清水遺跡調査風景



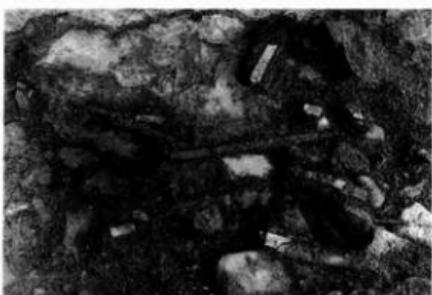
岩清水遺跡トレンチ



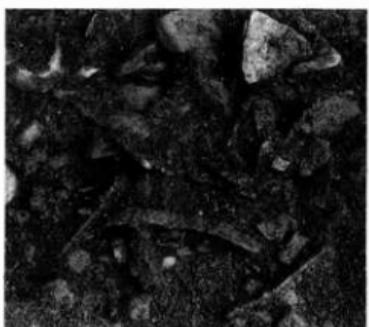
考古博物館構内古墳全景

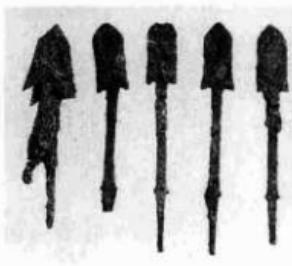
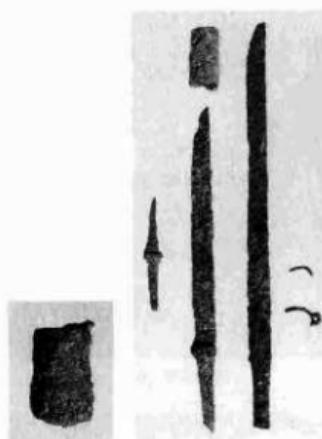
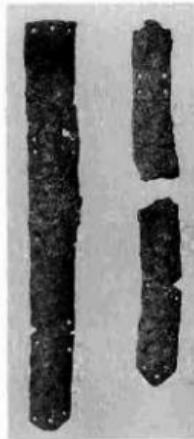
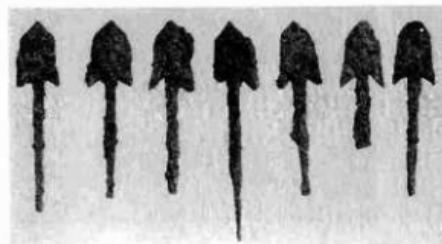
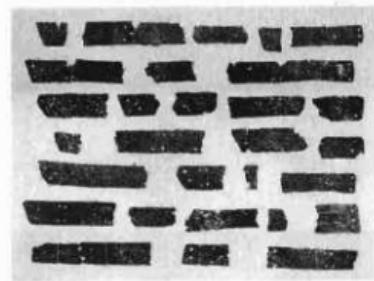
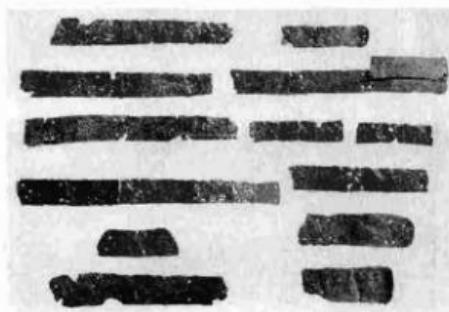
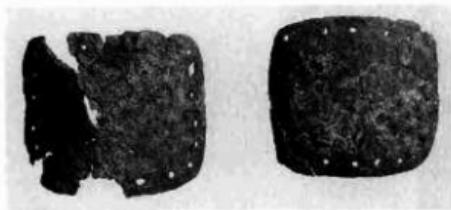


同東側壁・閉塞石



同遺物出土状況





古墳出土遺物（1）



古墳出土遺物(2)

昭和52年3月25日 発刷

昭和52年3月31日 発行

いわしきす こうこはくあつかんこうじ
岩清水遺跡・考古博物館構内古墳

山梨県埋蔵文化財センター

調査報告 第30集

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 ヨネヤ印刷

甲府市丸の内一丁目14-6

